

# 金沢英学校・致遠館での教育

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Itagaki, Eiji メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00053326">http://hdl.handle.net/2297/00053326</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



北陸医史第 41 号 平成 31 年 1 月 30 日発行

別刷」

**金沢英学校・致遠館での教育**

金沢市 板垣英治

## 金沢英学校・致遠館での教育

金沢市 板垣英治

金沢英学校は致遠館ともいわれ、英語教育を目的とした学校であった。本校は明治二年に開校して明治四年に国による学制が施行されるまでの短い間金沢に存在していた。本校で教育を受けた若者十数名が、その後上京して進学し高等教育を受け、明治初期の社会に大いに貢献していたことは特筆すべきことである。本稿では金沢英学校について詳述して、その事実を明かすことを目的とした。

本校についての参考資料は三宅秀「旧金沢藩英学校の沿革」(1)および寺畑喜朔「金沢の医育機関における明治期所蔵の英書」(2)があり、さらに関連校である七尾語学所について今井一良の「パーシバル・オスボンと七尾語学所における教え子たち」(3)がある。

### 金沢英学校の沿革

本校の沿革は図1に示すように、明治元年に「英仏学校」が豊屋九郎兵衛の能舞台で始まった。次い

て翌年二月にこれが「道済館」と呼ばれ、七、十七歳の生徒に英語教育を行った。教師は柴木昌之進、平田宇一等であり、その英語教育は変則であり、間違ったものであるとの批評があつた(4)。そこで本校の十五歳以下の生徒およびその他の一般の志願者から同じ年頃のものを選び出して、壮猶館内で英会話の出来る正則の英語教育を始めた。

これが廃寺となつた神護寺跡に学舎を構えることになつた。元神護寺は旧金沢・松原町(西町一番丁三四番地)にあり(図2)、これが「致遠館」と呼ばれ、さらに「金沢英学校」と称された(6)。

図1は道済館から英学校へ、次いで七尾語学所、中学東校をへて、石川県立啓明学校(中学師範学校)となつた沿革を示している。壮猶館内英学所分校が七尾語学所を指すとみられる。

### 金沢英学校・致遠館の場所

英学校が設置された旧神護寺の位置を図2に示す(7)。

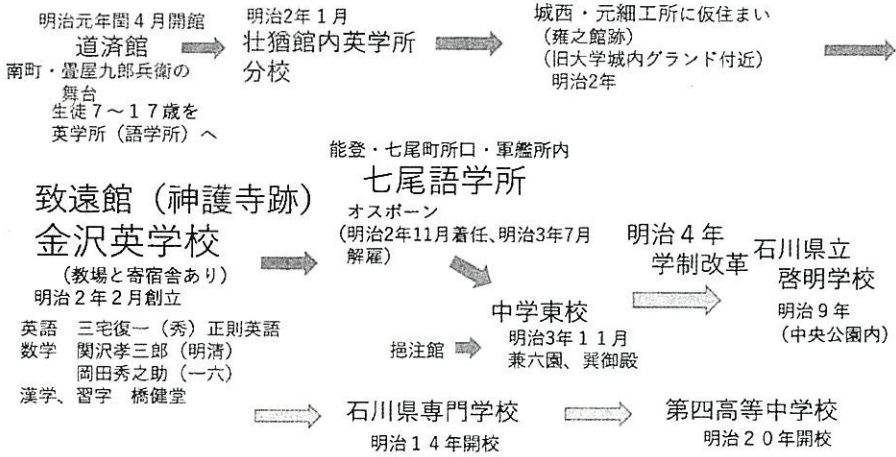


図1 金沢英学校の沿革

神護寺の絵図を図3に示す（8）。この寺には御法事殿があり、ここを生徒は寄宿舎として使用し、併せて英学校の校舎として使用したと推定される。致遠館の時は、図は左側の御佛殿は取り壊されていた。

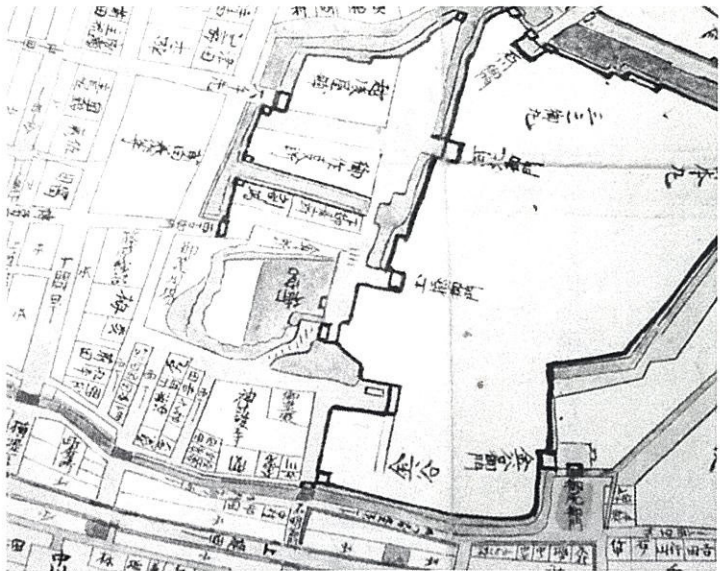


図2. 金府大絵図より神護寺の位置を示す。  
現在、尾山町の大谷廟所・大谷納骨堂の位置にあたる。近世史料館蔵。

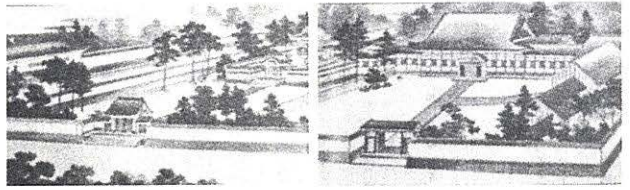


図3. 神護寺の境内絵図(8)  
左は御佛殿を示し、右は御法事殿を示す。

この事から、旧御法事殿が英学校の施設とされていた。

英学校の教則

英学校之規定は三宅秀により明治初年に作成されていた(1)。以下に本規定を示す。

- 一、道済館入塾生十五歳以下
- 一、道済館入塾生十五歳以下
- 一、道済館に留まり候事
- 一、十五歳以上にてても発音学

一、新に入塾の分は九歳より十三歳迄五十人斗、但し道済館より御移しの人を加えて六十人斗に候事

一、十三歳以上は算学相始め候事

一、先一統にスペリング、ブック綴書研窮為致候事

一、綴書成就の上初級に相進候事

- 一、初級 第一読本 第二読本 第三読本
- 一、二級 第四読本 文法書 地理書
- 一、三級 第五読本 第六読本 窮理書 歴史

一、塾生右三級を越え候時は夫々学科相定兵学医学等の学校に移り候事

一、算術等級 初級 数学十五点にて一教相進候事、二級 点竄学(幾何学)二十点にて一教相進候事、三級 三角術 三点にて一教進候事

一、英学稽古時割 朝自九時十時迄昼自一時二時迄

一、算学稽古時限昼二時より四時迄

一、外来稽古人は朝十時より出席十二時に稽古終り候事

一、飯時 朝八時、昼十二時、夕五時

一、休日 朔日 六日 十一日 十五日 二一日 二六日

一、右休日は前日稽古済次第日没迄に帰塾為致候事

一、入塾生朝十時後十二時迄夫々外諸稽古為致候事

習字、漢学

一、朝稽古、但し九時より十時まで致し候人々は昼後一時より二時迄復読為致し、午後稽古の人々

は朝復読為致候事

- 一、午後四時より外出勝手次第但し五時に帰塾の事
- 一、稽古定刻中、稽古場に出切りの事
- 一、入塾の日、父兄等の内と同道衣服等の義、父兄に申聞置候事

一、病気の節は医者申遣、教授役より詮議の上、全快迄退塾為致候事

但し朝六時迄右同断 以上

本規則により、本校の教育の概要を知ることが可能である。

本校の教官

三宅 秀ひで 英学教授 江戸本所生、横浜でヘボンに英学を学ぶ

長野 桂次郎 英学教授、旧幕臣

米国への洋行の経験ある(10)。

岡田 一六(秀之助) 英学教授 数学

英国に留学、帰国後着任(11)。

関沢 明清(孝三郎) 英学教授 数学、蘭学留学し

て仏語、英語を学ぶ。帰国後着任(12)。

橋 健堂 漢学、習字、「蒙求」を教える(13)。

本校のテキスト

本校のテキストとして例示するものはまだ目に触れていないが、二冊の書籍、歴史書と代数学書に「英学校印」の印影があり、本校で使用したとみられる書籍である(図4)(14)。

現存する「英学校印」の印影のある書籍

歴史書

White, H., Elements of Universal History,

on a new and systematic plan. 11th edition

Oliver and Boyd Tweeddale, Edinburgh, 1869.

「英学校印」石川県尋常中学校蔵書章

石川県立金沢泉丘高等学校蔵

代数学書

Davies, Charles. New Elementary Algebra,

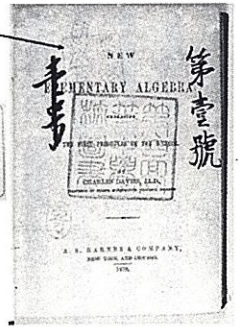
Embracing the first principle of the science.

A. S. Barnes & Company, New York, and

Chicago, 1870.

「英学校印」高岡町小学所」印

金沢大学付属図書館蔵



校英  
印学



図 4.

New Elementary Algebra.  
By Charles Davies, 1870.

金沢英学校の蔵書印がある。現在、金沢大学付属図書館に架蔵されている。次に掲載した書物は、本校の教科から推定され

る英書である(14)。これらの書籍には「学校」、「金沢学校」の印影が認められる。「学校」、「金沢学校」は加賀藩の藩校を示す。

英語テキスト 第一読本—第四読本

- Sargent, Epes, The Standard First Reader, for public and private schools, No. 1.
- Sargent, Epes, The Standard Second Reader, for public and private schools, No. 2.
- Sargent, Epes, The Standard Third Reader, for public and private schools, No. 3.  
John L. Shorey, Philadelphia, 1866.  
「学校」
- Sargent, Epes, The Standard Fourth Reader, for

public and private schools, No. 4.

John L. Shorey, Philadelphia, 1867.

「金沢学校」

英語辞書

• Webster, Noah, An American Dictionary of the English Language.

J. B. Lippincott, Philadelphia, 1867.

「金沢学校」

• Nuttall, P. Austin, The Standard Pronouncing Dictionary of the English Language, a new edition.

Frederick Warne & Co., London, 18--. 「金沢学校」

英文法書

• Chambers, W. & Chambers, R., English Grammar and Composition. William and Robert Chambers, London and Edinburgh, 18--. 「学校」

• Quackenbos, G.P., English Grammar, D. Appleton and Company, New York, 1867.

「学校」 「壮猶館文庫」 「加州蔵書」

• Pinneo, T.S., Pinneo's Primary Grammar for the English Language for Beginners, Wilson, Hinkle

& Co., Cincinnati, 1854.



図5. Pinneo 文法書、  
(1854)。

## 地理書

・Cornell, S.S., Intermediate Geography, forming part second of a systematic series of school geographies. D. Appleton & Co., N. Y., 1869.

## 「学校」

## 歴史書

・White, H., Elements of Universal History, Oliver and Boyd Tweeddale, Edinburgh, 1869.

## 算理学書 (物理学書)

・Quackenbos, G. P., Natural Philosophy, Embracing the most recent discoveries in the various branches of physics. D. Appleton & Co., N. Y., 1869.

## 「学校」

## 代数学書

・Davies, Charles. New Elementary Algebra 1870.

## 三角術

・Todhunter, Isaac, A Treatise on Plane Co-ordinate Geometry, as Applied to the Straight Line and the Conic Section, Macmillan & Co., London, 1867.

## 「学校」

なお、本校の英書籍の入手に関して以下の事柄が拘わっていた(15)。

慶応四年に、幕府洋書調所で英語教授に必要な教科書を英国留学中の菊池大六、外山正一らに命じて購入した。ところがこの書籍が江戸へ到着した時は、すでに幕府瓦解の後であった。そのためすべての書籍は幕府では不要のものとなった。外国方から三宅の父親に相談があり、三宅が書目を一覧して、頗る廉価であることから、これを買入れることになった。これが金沢の学校を開くための書籍として納められた。

それらは、英文読本、文法書、地理書、算術・代数・



幾何書、歴史書、字典類であった。

この様な好機により、貴重な英書が入手されたのであった。ところが、前述したように、現在「英学校印」の印影の残る書籍は2冊のみである。これ以外の書籍は「加賀藩旧蔵洋書綜合目録」(14)から類推して撰んだ。

### 英学校の生徒

英学校に入学した生徒は石黒五十二、瓜生外吉、桜井錠二、高山甚太郎、平井晴二郎、近藤仙太郎、沢田駒次郎、斯波淳六郎、土田鉄雄等であることが図6の写真から分る。さらに久田督が加わっていた(16)。

入学生の出身地と入学時年齢は次の如くであった。

沢田駒次郎	小松	26才
瓜生 外吉	大聖寺	13才
高山甚太郎	大聖寺	13才
斯波淳六郎	金沢	9才
土田 鉄雄		12才(推定)
石黒五十二	金沢・彦三	14才
平井晴二郎	金沢城下	13才

近藤仙太郎	金沢	11才
桜井 錠二	金沢	11才
久田 督	金沢	12才

当時の教育機関は、入学年齢の制限を設けていなかった。学生は凡て学寮で生活することは決められていた。入学生数については、資料には30〜40名と或いは70〜80名と記したものがあ(1、6)が、実際に在籍した生徒数を示す史料が不明である。

図6写真の前列、左より沢田駒次郎、瓜生外吉、三宅秀、高山甚太郎。

後列、左より斯波淳六郎、土田鉄雄、石黒五十二、平井晴二郎、桜井錠二、近藤仙太郎である。卒業以来三十五年目の再会の写真である。

### 英学校卒業生その後の活躍

三宅秀を始め、九人の生徒達はそれぞれ進学して専門の学問を学んだ。概略を以下に示す。

三宅秀 明治3年 大学出仕、明治7年 東京医学  
学校校長心得、明治14年 東京大学医学部長、医科  
大学教授(9)。



右6 英学校の教師と生徒の再会 明治38年11月撮影(16)

京化学会会長、大正6年理化学研究所初代副所長、昭和7年日本学術振興会会頭(17)。

石黒五十二 明治2年致遠館に学ぶ、明治3年七尾語学所、明治4年大学南校、東京開成学校、東京大学、明治11年同学工学部土木工学科卒、同年、神奈川県土木出仕、明治12年イギリス留学、明治16年帰国、内務省出仕、各地で水道、土木工事をを行う。土木監督署技監、海軍技監を歴任す(18)。

斯波淳六郎 明治2年致遠館、明治16年東京大学法学部卒、同研究生、文部省留学生としてベルリン大学で国法学、行政法、国際法を学ぶ。明治21年帰国、帝国大学法科大学教授、法制局参事官兼務、明治31年内務省社寺局長(19)。

瓜生外吉 明治3年七尾語学所、明治5年海軍兵学校、明治8年アメリカに留学、明治14年アナポリス海軍兵学校卒、海軍中尉任官、明治33年海軍少将、第四戦隊司令官として日露戦争に参戦、仁川沖海戦に勝利した。大正元年海軍大将に昇任した(20)。

桜井錠二 明治2年致遠館入学、明治3年七尾語学所、明治4年大学南校、明治6年開成学校、化学専攻、明治9年10月国費留学生でロンドン大学に留学、物理化学の分野を研究。明治14年9月帰国、東大理学部講師、明治15年東大教授、明治16年東

平井晴二郎 明治2年致遠館、明治3年七尾語学所、明治3〜4年大学南校、開成学校工学、明治8年文部省海外留学生、米国ニューヨーク州トロイの

Rensselaer Polytechnic Institute, (私立工科大学) に入學、工學土木工學を専攻する。明治13年英仏を經歷して帰國、鉄道技師として北海道敷設工事を担当し落成させた。明治41年鉄道院副總裁に就任する(21)。

近藤仙太郎 明治2年致遠館に學ぶ。東京大學を卒業後、内務省に入省、利根川改修に長年に渡り尽力した。近藤は、明治18年から利根川低水工事に従事した。その後、大井川、天竜川等の改修計画に関わった。再び利根川改修に従事し、明治31年に「利根川高水計画書」を完成させ、この計画書に基づき明治33年に利根川改修工事が開始され、その後、幾度かの計画見直しが行なわれ現在に至っている(22)。

沢田駒次郎

明治2年致遠館、明治3年七尾語學所、上京し大藏省幣寮に勤務、後に東大・植物園に入り、薬用植物を研究、第一高等学校医学部助教授、日本薬局方植物篇刊行、退官後、台湾總督府直轄藥売局製藥課に勤務(23)。

高山甚太郎 明治2年致遠館、明治3年七尾語學所、

明治4年中学東校、文學訓蒙、東大進學、工學部、明治19年農務省分析課長、明治22年ドイツ出張、明治27年工部大學校講師、明治29年製鉄所技師、欧米へ視察出張、明治33年工業試験所設立(24)。

土田鉄雄 明治2年致遠館に學ぶ。東京大學に進學、土木工學科で土木工學を學ぶ。明治14年卒業。土木監督署に勤務。明治41年新潟市上水道布設計画立案し、同43年に完成した(25)。

久田督 明治2年致遠館で學ぶ、明治3年七尾語學所、中学東校小学所で訓蒙、明治7年長崎英學校、明治8年東京外国語學校、開成學校予科、明治14年東京大學理學部卒業。明治30年9月石川県工業學校校長、明治32年石川県立第一中學校第三代校長(現・金沢泉丘高等学校)(図7)(26、27)。

著作「化学教科書」(図8)がある(28)。

昭和29年銅像

復活(29)。



図7 久田督肖像  
金沢泉丘高等学校在。



図8、「尋常中学校・尋常師範学校・化学教科書」標題頁。明治22年、春陽堂刊 (28)。

## 考察

幕末から明治初期には、西洋文明の教育をめざして私塾の乱立した時代があった。金沢には英仏塾、英仏学校、英学校、変則中学校などが乱立し、また短期間に廃校になっていた。

兼六園・異御殿の「道済館」では柴木昌之進、平田宇一らが英語教育を行っていたが、教育は頗る変則的なものであった(1)。当時、英語辞書はなく、英文翻訳を行った書籍には、単語毎に発音をカタカナ表記で書き込んでいた。これに対して、正則の英語教育を目指して、洋行経験者が教育を行う金沢英学校が明治二年二月に開校した(4)。始めは壮猶館

内にあったが手狭となり、城内細工所跡に移り、さらに、廃寺となった神護寺跡に移転した。同寺の御法事殿に設置されたと考えられる(6)。

本校の中心的存在は横浜でヘボンに英語を習った三宅秀であったが、彼は父親および母親の看病のために帰京した。その代わりとして、三宅の英語教師でもあった長野桂太郎が校長に就任した(1)。関沢孝三郎、岡田秀之助も英国に留学した英語経験者であった。

本校の生徒数は常に七・八十人とあり、全員入塾して、通学を許さなかったと史料(6)に記載されている。ところが明治三年十一月に兼六園内の元辰巳御殿(異御殿)に移転し、城中の挹注館を併せて中学東校となった。しかし、三宅資料には生徒数に関する事は記されていない(15)。明治三十三年の写真の8名、および七尾語学所に在籍した者の数から約十名と推定される(16)。

明治三年始めに加賀藩は本校の成績優秀な生徒達を Osborn が到着したばかりの七尾語学所に送りこんでいた。ところが Osborn は同年七月に契約切れとなり、金沢に戻ることにになり、語学所は閉鎖となっ

た(4)。生徒の履歴を調べた結果、彼らはそれぞれ上京して、開成学校や第一高等学校に進学し、さらに東京大学で専門教育を受けていたことは特筆すべき事柄である。

石黒は工学校で土木工学を学び水道工事・土木工事の監督として活躍した(15)。近藤は内務省技監として河川改修・治水に活躍した(22)。平井は鉄道技術者として北海道での敷設工事を行った(21)。高山は工学を専攻し、農政省分析課で活躍、工業試験所の設立に貢献した(24)。桜井はロンドン大で物理化学の研究をおこない、帰国後東大教授に就任。東京化学会会長を歴任した(17)。斯波は東大で法学を学び、ベルリン大に留学して国際法を学び、帰国後、帝法科大学教授に就任した(19)。瓜生は海軍兵学校に入学、米國アナポリス海軍兵学校を卒業し、海軍中尉に任官、第四戦隊司令官として日露戦争に参加した(20)。

久田督については、「金沢教育史稿」によれば、「安政五年加賀藩士久田守久の長男に生まれ、明倫堂、次いで壮猶館に学び、明治三年には七尾語学生に選ばれて、高峰、桜井らと机を並べ、オスボンにつ

いて英学を修めた。」(以下略)と記されていることから、金沢英学校で英語を学んだと見ることができ(26)。彼は後に金沢第一中学校の第三代校長であり、その面影は顕彰銅像に見る事が出来る(図6)(29)。

本校の多くの生徒がこの様に優れた人物として成長した一つの要因は、海外留学経験者による教育にあると考えられる。この事は、明治十七年以来の石川県専門学校卒業生達の卒業生達及び明治二十年代の第四高等学校卒業生達の多くが上京して、高等教育を受けたことと重なって見える。当時、東大の学生の出身地を調査した資料によれば、東京以外では石川県の出身者が最も多くを占めていた。木村栄、井上友一、鈴木貞太郎、藤岡作太郎、西田幾多郎、斉藤徳五郎、藤井健次郎等の多数の方々の名前が残っている(30、31)。

以上、明治二年開校した金沢英学校での教育についてその概要を記述した。明治四年の学制の施行により、閉校となり、忘れ去られた教育機関となった。

文獻

1. 三宅秀「旧金沢藩英学校の沿革」加越能時報 205號、28—31頁、明治38年。
2. 寺畑喜朔「金沢の医育機関における明治期所蔵の英書」、北陸英学史研究、11—15頁、(1987)。
3. 今井一良「パーシバル・オスボンと七尾語学所における教え子たち」英学史研究 1984巻、第16号、51—62頁、(1983)。
4. 石川県史、第三編、第三章 学校、致遠館、七尾語学所、186—187頁、(1972)。
5. 板垣英治、加賀藩の藩校・明倫堂と経武館の歴史と明治以後の高等教育の発展、全国藩校サミット金沢大会、平成29年、18—29頁。
6. 稿本金沢市史、第七節、第一項、致遠館、432—434頁、昭和48年、金沢市。
7. 金府大絵図、神護寺の位置を示す。金沢市立玉川図書館・近世史料館蔵。
8. 稿本金沢市史、第七節、第一項、致遠館、434—435頁、昭和48年、金沢市。
9. 三宅秀、日本博士会全伝、100—102頁、明治25年。国会図書館デジタルライブラリー。
10. 山森專吉、加賀藩の英学、日本英学史研究会研究報告 第19号、17—19頁、(1965)。「トミー」という名の日本人」日米修好史話、1975年刊、69—71頁。
11. 石川県史、第三編 第3章 学校・宗教 第一節 学校、190—191頁、(1972)。
12. 「関沢明清の生涯」和田穎太著、(1994)。
13. 橋健堂 Wikipedia
14. 板垣英治、加賀藩旧蔵洋書綜合目録、金沢大学資料館(2006)。
15. 三宅秀、加越能時報 209号 14—15頁、1941年。
16. 加越能時報、204号、口絵、旧金沢藩致遠館師弟の再会、写真。明治38年。
17. 桜井錠二、日本博士会全伝、214—216頁、明治25年、花房吉太郎、山本源太郎共編、博文館刊。国会図書館デジタルライブラリー。
18. 石黒五十二、日本博士会全伝、313—316頁、明治25年。国会図書館デジタルライブラリー。

19. 斯波淳六郎、歴代頭官録、内務省神社局長人事、170頁、大正14年。国会図書館デジタルライブラリー。
20. 瓜生外吉、歴代頭官録、海軍部、544頁、大正14年。国会図書館デジタルライブラリー。
21. 平井晴二郎、日本博士会全伝、289―290頁、明治25年。国会図書館デジタルライブラリー。
22. 近藤仙太郎、利根川改修の父、川を治めた土木工技術者たち、藤井三樹夫、「国土を創った土木技術者たち」、国土政策機構編、鹿島出版、平成12年。
23. 沢田駒次郎、植物学雑誌 第百三十九号、日本薬局植物篇、繙草根、293―298頁、1898年。任用通知、明治31年4月18日、文部省秘書課、東京帝国大学、東大文書館デジタルアーカイブス。台湾総督府職員録系統、専売局製薬課囑託、明治36年。
24. 高山甚太郎 日本博士会全伝、320―322頁、明治25年、花房吉太郎、山本源太郎共編、博文館刊。国会図書館デジタルライブラリー。
25. 土田鉄雄 中央大学史資料集 第3集、122頁。
26. 久田督 右に同じ資料、金沢市教育史稿、日置謙著、1919刊、164―165頁、石川県教育会金沢支会。
27. 石川県教育雑誌、石川県教育会発行、第92号、明治44年3月。
28. 久田督、「尋常中学校・尋常師範学校・化学教科書」明治22年、春陽堂。国会図書館デジタルライブラリー。
29. 金沢一中・金沢泉丘高校百年史・前編、77頁、(1993)百年史編集委員会。
30. 板垣英治、「金沢大学の淵源」(2012)金沢大学資料館、130―134頁。
31. 江森一郎「明治中期までの石川県教育の一面」市史かなざわ、第十号、75―82頁、(2004)。(注記。各人の経歴中に東大と記したものは、当時は工部学校であった。)